

哺乳類研究グループ 第15回シンポジウム

哺乳類における種と生活

オルガナイザー：阿部 永（北大・農・応動）

哺乳類研究グループによる 第15回シンポジウムで、哺乳類における生活というものがどのように分化し、またそれらが全体として他の動物群の生活とどのように違っているのかという問題を主題とした。

久保氏は鳥類の社会を群れとなわばりという観点からとらえ、鳥類の生活が両生・は虫類のもつそれと質的に異なっていることを指摘した。白石氏はネズミ類の具体的生活内容を紹介してその特徴を示し、庫本氏はコウモリ類の最大の特徴である飛しょう適応を軸として形態、生態における発展の方向を示したほか、胎児の生長発育に関する問題点を指摘した。水原氏は霊長類においては個体性の発達に伴って群れや順位制の性質が変化し、その結果として社会が高度にオルガナイズされる過程をのべ、同時に、行動を単純に類形化することの誤りについて警告を行った。渋谷氏は人間の社会学者の成果をとり入れつつ哺乳類の中における人間の生活様式と他の動物のそれを比較した。そして動物の生活様式と人間の生活における消費様式を対比させた。また、氏は哺乳類における中枢神経系の発達とその生活における対応に関する具体的研究の必要性を説いた。

ここでは哺乳類の生活の特徴を多面的に論議することを目的としたが、時間制約もあって哺乳類全体をとりあげることができなかったのは残念である。ただ、ここで指摘されたいくつかの問題が今後この方面の研究に示唆を与えるものであると思われる。

鳥類の社会関係について

久保浩洋（佐賀大・教養・生）

種の生活の概括には少なくとも種の生態学全般をのべると同様と考えられ、困難を感じた。ここでは、高等脊椎動物の生活を論議するとき共通して重要と

考えられる社会関係に焦点をしばるとともに、さらに鳥類の社会関係を脊椎動物の社会関係の進化過程の中に位置づけよう心掛けた。

伊藤嘉（1959）は脊椎動物の生活様式を比較検討して、富栄養・敵・危険の多い環境で群れ生活が、貧栄養環境では卵子供の保護と孤独生活（またはなわばり生活）が発達する傾向があるとのべた。しかし陸上脊椎動物においては、環境要因よりも、陸上進出にともなう運動能力の変化と卵子供の保護の発達によって食物獲得と敵への対応状態が変化したという動物の主体的条件の変化を考えたほうが、社会関係の実際により妥当していると考えられる。このように考えると、魚・鳥・哺乳類に群れがあり両棲・爬虫類にないこと、両棲・爬虫に個体中心の孤独生活があるのに鳥類では夫婦（または家族）中心の孤独生活があることなどが一応了解できるように思われる。

鳥類における社会関係では、一般的には、非繁殖期に群れ性が、繁殖期には孤独性が強くなる傾向があるが、1) 孤独生活をするもの、2) 非繁殖期に群れ生活を、繁殖期には孤独生活をするもの、3) 群れ（コロニー）生活をするものの3グループに大別される。これらはほぼ食物獲得の難易の程度と対応しているが、系統とはほとんど関連がないようにみえる。しかし鳥類における社会関係のさらに詳細な分析には、単に食物・敵などの条件だけでなく卵子供の保護、脳の発達など他の条件をも考慮する必要がある。

ネズミ類の生活

白石 哲（農林省林業試・保護・鳥獣第1）

ネズミ類とは広義にはげっ歯目（Rodentia）に属する動物群のうち、ネズミ亜目（Myomorpha）としてまとめられる小型の哺乳類をさし、狭義にはネズミ上科（Muroidea）に属するグループをさしている。ネズミ上科のうち旧大陸においてもっとも繁栄